

大学生の友人に対する援助要請意識と文化的自己観の関連

高田 純¹⁾, 井邑 智哉²⁾, 芥川 亘³⁾

本研究は、文化的自己観に注目し、大学生の友人に対する援助要請を促進させる要因を明らかにすることを目的とした。分析の結果、援助要請に対する肯定的態度と相互協調的自己観は有意な相関関係があることが認められた。また、援助要請意識のモデルを共分散構造分析によって検討したところ、文化的自己観から援助要請意識を経て精神的健康に至る有意なパスが認められた。大学生の友人に対する援助要請行動を促進させるためには、文化的自己観や精神的健康に注目した関わりが重要であると考えられた。

キーワード：援助要請，文化的自己観，精神的健康

A Study on the Relationship Between the Unprofessional Help-seeking Consciousness for University Students and Cultural Views of Self

Jun TAKATA¹⁾, Tomoya IMURA²⁾, Wataru AKUTAGAWA³⁾

The purpose of this study was to investigate the factor which promotes the unprofessional help-seeking consciousness for university students from viewpoint of cultural views of self. As a result, affirmative attitude to help-seeking and interdependent construal of self were significantly correlated. And, the process of unprofessional help-seeking consciousness model was examined an analysis of covariance structures and a significant pass from cultural views of self to mental health via help-seeking consciousness. It was thought that relation which observed cultural view of self and mental health was valuable in order to promote the unprofessional help-seeking.

Key words: Help-Seeking, Cultural Views of Self, Mental Health

I. 問題と目的

個人が問題状況に遭遇し、自分で問題を解決出来ないとき、他者に援助を求める行動は援助要請行動と呼ばれ、その際の意識は援助要請意識という。大学キャンパスにおいては、学生は精神的健康等の問題に対し、学生相談室などの専門機関に援助要請を行うことができる。一方、大学側も専

門機関を設置するだけでなく、問題の予防や専門機関への援助要請も含めた対処能力の向上を狙いとした教養教育を行っている¹⁾。しかし、学生は問題解決のために専門機関よりも、より身近な友人や家族に対して援助要請することが知られている²⁾。そのため、学生に対する教育の中で、専門機関への援助要請に限らず、友人に対する援助要請意識を向上させ、援助要請行動を促進するため

1) 広島大学保健管理センター
2) 精華女子短期大学幼児保育学科
3) 岩国医療センター精神科

1) Health Service Center, Hiroshima University
2) Department of Early Childhood Education and Care, Women's Junior College
3) Department of Psychiatry, Iwakuni Clinical Center

の要因の検討が求められている。

ところで、学生の援助要請行動に関連すると考えられる概念のひとつに、文化的自己観がある。文化的自己観とは、ある文化の中で歴史的に作り出され共有されている自己についての概念であり、相互独立的自己観と相互協調的自己観とに分けられる。相互独立的自己観とは、西欧において優勢とされる自己観であり、自己は他者と区別され独立しており、自己の上に人間関係が成立するという自己観である。一方、相互協調的自己観とは、自己は他者と根源的に結びついており、人間関係の中に自己が成立するという自己観である。わが国では相互協調的自己観が強調されており、他者との協調性や類似性が重視されている³⁾。このような文化的自己観は、アイデンティティの獲得を発達課題とし、仲間との関係の中で自己の在り方を模索し続ける青年期においては特に重要な意味を持つ。

そこで本研究では、大学生の友人に対する援助要請行動を促進させる要因を明らかにするため、文化的自己観および精神的健康に注目し、学生の友人に対する援助要請のプロセスを検討することを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象および手続き

2012年6月－7月にかけて、A県内の3大学において、集団法による質問紙調査を実施した。なお、調査の目的、自由意志による回答、個人情報やプライバシーの保護など、研究上の倫理についての説明を質問紙の表紙に記載し読み上げた。また、調査では個人情報を保護するため、無記名で回答してもらい、回答済みの質問紙は講義の時間内にその場で回収した。

2. 分析対象者

有効回答は139名であった。分析対象者の内訳は、男性109名、女性30名であった。平均年齢は19.2歳 ($SD=1.8$) であった。

3. 質問紙の構成

1) 援助要請意識項目：大学生の援助要請意識を測定する項目として、芥川の尺度を使用した⁴⁾。本質問項目は「肯定的態度」、「相談への不安」、「自己評価の低下」の3下位尺度からなる(全12項目)。各項目について、「1. そう思わない」から「5. そう思う」までの5件法で回答を求めた。

2) 文化的自己観尺度：文化的自己観を測定する尺度として、高田・大本美・清家の尺度を使用した⁵⁾。本尺度は「相互独立的自己観」、「相互協調的自己観」の2下位尺度からなる(全20項目)。各項目について、「1. 全く当てはまらない」から「7. 非常に当てはまる」までの7件法で回答を求めた。

3) 精神的健康を測る尺度：大学生の精神的健康を測る尺度として、新名・坂田・矢富他のストレス反応尺度を使用した⁶⁾。「ポジティブ感情」、「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」の3下位尺度からなる(全15項目)。各項目について、「1. 全く当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」までの4件法で回答を求めた。

4) フェイス項目：属性として、性別、年齢について尋ねた。

4. 統計解析

統計解析には、統計解析ソフト SPSS 17.0 および Amos 6.0 を使用し、データの解析方法は相関分析および共分散構造分析を行った。

III. 結果

1. 各変数の信頼性の検討

援助要請意識項目について、「肯定的態度」は $\alpha=.74$ 、「相談への不安」は $\alpha=.80$ 、「自己評価の低下」は $\alpha=.75$ であった。文化的自己感尺度について、「相互独立的自己観」は $\alpha=.79$ 、「相互協調的自己観」は $\alpha=.78$ であった。精神的健康度を測る尺度について、「ポジティブ感情」は $\alpha=.90$ 、「抑うつ・不安」は $\alpha=.73$ 、「不機嫌・怒り」は $\alpha=.82$ であった。以上より、本研究で用いた尺度の α 係数は .73-.90 の範囲にあり、おおむね内の一貫性が確保された。

2. 各変数の平均値および標準偏差

援助要請意識、文化的自己観、精神的健康度の各尺度の下位尺度について平均値および標準偏差をそれぞれ算出した（表1）。

表1 各尺度の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
肯定的態度	3.42	0.84
相談への不安	2.51	0.88
自己評価の低下	2.68	0.91
相互独立的自己観	3.95	0.82
相互協調的自己観	4.91	0.83
ポジティブ	2.56	0.77
抑うつ・不安	2.15	0.65
不機嫌・怒り	2.01	0.71

3. 援助要請意識と他の変数との関連

援助要請意識と、影響を与える可能性が考えられる文化的自己観および精神的健康度の下位尺度得点をもとに相関係数を算出した（表2）。その結果、援助要請意識の「肯定的態度」と文化的自己観の「相互協調的自己」に弱い正の相関（ $r=.37$ ）、精神的健康度の「ポジティブ感情」に弱い正の相関（ $r=.29$ ）が認められた。次に、援助要請意識の「相談への不安」と、精神的健康度の「ポジティブ感情」に弱い負の相関（ $r=-.25$ ）、「抑うつ・不安」に弱い正の相関（ $r=.27$ ）、「不機嫌・怒り」に弱い正の相関（ $r=.29$ ）が認められた。また、

援助要請意識の「自己評価の低下」と「ポジティブ感情」に弱い負の相関（ $r=-.25$ ）、「抑うつ・不安」に弱い正の相関（ $r=.30$ ）、「不機嫌・怒り」に弱い正の相関がみられた（ $r=.23$ ）。

4. 援助要請意識、文化的自己観、精神的健康度を包括するモデルの検討

援助要請意識、文化的自己観、精神的健康の関係について、文化的自己観が援助要請意識に影響を及ぼし、さらに援助要請意識が精神的健康に影響を及ぼすというモデルを想定し、共分散構造分析による検討を行った。なお、援助要請意識尺度、文化的自己観尺度、精神的健康を測る項目の各下位尺度得点を観測変数として分析を行うこととした。また、分析の際には修正指標に基づいた誤差相関を導入することにより修正を繰り返し行った。有意な影響がみられなかった「自己評価の低下」についてはパスを削除して検討を行った。分析の結果、相互関係を規定したモデルの適合度指標（GFI=.968, AGFI=.911, RMSEA=.066）は許容範囲の適合値を示したので、適合範囲内のモデルであると判断された（図1）。まず、「相互協調的自己観」から「肯定的態度」を媒介して「ポジティブ感情」に至る間接的効果だけでなく、「相互協調的自己観」から「ポジティブ感情」や「抑うつ・不安」へ至る直接的効果も認められた。また、「相互独立的自己観」から「相談への不安」を媒介として「抑うつ・不安」に至る経路や、「不

表2 援助要請意識、文化的自己観、精神的健康の相関分析結果

	I	II	III	IV	V	VI	VII
I 肯定的態度							
II 相談への不安	-.14						
III 自己評価の低下	-.13	.49 **					
IV 相互独立的自己観	-.14	-.19 *	.10				
V 相互協調的自己観	.37 **	.07	.12	-.23 **			
VI ポジティブ感情	.29 **	-.25 **	-.25 **	.13	-.14		
VII 抑うつ・不安	.05	.27 **	.30 **	-.18 *	.33 **	-.35 **	
VIII 不機嫌・怒り	-.09	.29 **	.23 **	-.08	.12	-.34 **	.63 **

* $p<.05$, ** $p<.01$

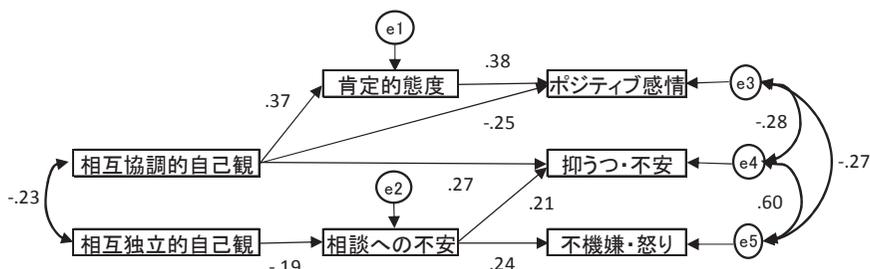


図1 共分散構造分析の結果

機嫌・怒り」に至るといふ間接的効果が有意であった。

IV. 考察

1. 援助要請意識と他の変数との関連について

本研究の目的は、援助要請意識と関連する要因を検討することであった。分析の結果、相談に対して肯定的であるほど、相互協調的自己観は高く、ポジティブ感情が高いことがわかった。相互協調的自己観とは、先述した通り、自己を他者と互いに結びついた人間関係にあると捉える考え方であり、「甘え」と正の相関のある概念である⁷⁾。先行研究を踏まえると、友人への相談に対して肯定的な人には、自分の悩みを開示し頼っても大丈夫と思えるだけの信頼関係があり、かつ、自分に対する高いポジティブ感情があるものと考えられる。一方で、友人への相談に対して否定的な場合には、他者との結びつきを感じられず、自分に対するポジティブ感情が低いものと考えられる。

また、相談への不安や自己評価の低下への懸念が強いほど、精神的健康度が低いことが示された。これは、抑うつ・不安といった症状を抱えていても、相談行為によってさらに自己が脅かされないように他者と距離を取っているか、援助が必要な問題であると意識していない可能性が考えられた⁸⁾。そのため、学生に対する教育においては、友人への相談を強いるのではなく、まず本人の安全を保障する関わりが必要であると考えられる。

2. 援助要請意識、文化的自己観、精神的健康度を包括するモデルについて

次に、文化的自己観と精神的健康との間に援助要請意識がどのように媒介し、影響しているか仮説モデルを設定し、プロセスの検討を行った。その結果、相互独立的自己観は友人に対する相談への不安を低減させるが、抑うつや怒りといった否定的感情を強めることが示された。相互独立的自己観を有する個人は、自己が脅かされない限り内集団に関心を示すことはないが、困っているときは他者に関心を示すと指摘されている⁹⁾。そのような問題解決志向的な距離の取り方が、相談に対する不安を低減させるものと考えられる。また、相談への不安が高まる場合には、既に自己が脅かされている状況と考えられるため、抑うつや怒りなど否定的な感情が強まるものと考えられる。そのため、相互独立的自己観の高い学生に対しては、危機的状況に陥る前に自然に他者に援助が求められるよう働きかけていく必要がある。

一方、相互協調的自己観は、ポジティブ感情に負の直接的な影響があり、抑うつ・不安への正の直接的な影響が示されるなど、直接的には精神的に負の影響があることが示された。さらに、友人に対する相談について肯定的な態度を媒介してポジティブ感情に影響していることが明らかになった。相談に対する肯定的な態度を介することでポジティブ感情に影響を及ぼすということは、相談に対してメリットを感じているものと考えられる。先の相関分析の結果を踏まえれば、相互協調的自己観は直接的には精神的に負の影響を与えるが、関係の維持に徹するのではなく、相談できる

肯定的な友人関係を築く経路を経ることで、精神的健康に寄与するものと考えられる。そのため、相互協調的自己観が高い学生については、関係を促進させ相談によるメリットを感じられるよう、アサーションなどのコミュニケーションスキルの獲得を意識した関わりが望まれる。

V. 結 論

大学生の友人に対する援助要請行動を促進させるためには、学生の文化的自己観や精神的健康度に注目した関わりが有効である可能性が示唆された。具体的には、①相互協調的自己観が強く、関係の維持のみが重視されている場合には、他者に相談することによるメリットを感じられるようなスキルの獲得が有効である可能性がある。②相互独立的自己観の強い学生に対しては、危機的な状態に陥る前に他者に援助が求められるよう働きかけていく。③学生の精神的状態によっては、安全の保証を意識した関わりが必要な場合もある。

文 献

- 1) 高野 明, 長尾裕子, 吉武清實, 他: 講義「学生生活概論」の学生の援助要請に対する効果の検討. 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 4: 81-87, 2009.
- 2) 木村真人, 水野治久: 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—. カウンセリング研究, 37: 260-269, 2004.
- 3) 北山 忍: 文化的自己観と心理的プロセス. 社会心理学研究, 10: 153-167, 1994.
- 4) 芥川 亘, 兒玉憲一: 大学生の友人に対する援助要請意識尺度の作成. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8: 33-42, 2010.
- 5) 高田利武, 大本美千恵, 清家美紀: 相互独立的—相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成. 奈良大学紀要, 24: 157-173, 1996.
- 6) 新名理恵, 坂田成輝, 矢富直美, 他: 心理的ストレス反応尺度の開発. 心身医学, 30: 29-38, 1990.
- 7) 玉瀬耕治, 岩室暖佳: 関係性の維持と個の主張に関わる問題—「甘え」とアサーションを指標として—. 奈良教育大学紀要, 53: 37-45, 2004.
- 8) 梅垣佑介, 木村真人: 大学生の抑うつ症状の援助要請における楽観的認知バイアス. 心理学研究, 83: 430-439, 2012.
- 9) 中嶋健一郎, 磯部智加衣, 長谷川考治, 他: 文化的自己観とストレスフルイベントの経験頻度が個人の集団表象に及ぼす影響. 実験社会心理学研究, 49: 122-131, 2010.